

基礎講座（選択制）A ビジュアルアーツ

施設における子供向けプログラムの実践から学ぶ

～ 東京都現代美術館の教育普及プログラムについて―こども向け事業を中心に ～

鳥居 茜氏 東京都現代美術館　教育普及係長　学芸員

2007年より国立新美術館 教育普及担当研究補佐員、2011年よりNPO法人芸術家と子どもたち プログラム・コーディネーターを経て、2015年より東京都現代美術館 教育普及係に着任。2023年5月より現職。学校団体等を対象とした作品鑑賞プログラムやワークショップの企画・実施をはじめ、ボランティアのコーディネート、視覚障害の有無にかかわらず活用できる鑑賞サポートツールの企画・開発など、幅広い教育普及事業の企画・運営を担当。様々な人が対話や体験を通して美術に親しむ機会を創出するとともに、誰もが安心して美術館を利用できる環境づくりに取り組んでいる。

基礎講座（選択制）では「施設における子供向けプログラムの実践から学ぶ」をテーマに、A ビジュアルアーツとB パフォーミングアーツの2つのプログラムを実施しました。

A ビジュアルアーツでは、講師に東京都現代美術館で教育普及係長を務める鳥居茜さんをお迎えし、同館のリニューアルにおける取組から、子供から大人まで参加できるプログラムの工夫、学校訪問事業まで、施設運営の現場に根ざした具体的な実践を伺いました。

■東京都現代美術館のリニューアルから見る、誰にでも優しい空間づくり

鳥居さんは最初に、東京都現代美術館のリニューアル・オープンについてお話しになりました。東京都現代美術館は1995年の開館から約20年を経て、2019年にリニューアル・オープン。経年劣化への対応に加え、「利用者サービスの向上」を大きな柱に掲げ、部署横断のプロジェクトチームで回遊動線の整備やバリアフリー化を進めたと語りました。

リニューアルでは、開館時の設計を手がけた柳澤孝彦＋TAK建築・都市計画研究所が掲げていた「公園からの誘導」



という当初のコンセプトにも向き合い、隣接する木場公園で過ごす小さな子供連れの家族にも気軽に美術館を利用してもらえるようにパークサイドエントランスの整備をし、パラソル付きのベンチを設置。遠くからでも「あそこに座れそうだ」「お弁当を広げられそうだ」と分かるようにすることで、公園と館内をゆるやかにつなぐ工夫をしたといいます。建物の躯体を変えられないという制約の中で、子供を含むさまざまな人に優しい空間づくりを意識し、什器や案内サインには柔らかい印象のコルク素材を利用するなどの工夫も紹介しました。

また、女性も男性も利用できるオムツ交換台の設置や授乳室の整備を進めたほか、地下1階にある美術図書館の一角には音が漏れることを気にせずに親子で読み聞かせが楽しめる「こどもとしょしつ」を新設。カフェ＆ラウンジは外から持ち込んだ食事も楽しめる場所とし、離乳食を食べさせることもできると語りました。さらに、レストラン「100本のスプーン」では、離乳食を初期・中期・後期に分けて無料で提供しており、キッズフレンドリーなメニューも展開。同館ではそのほか、貸し出し用ベビーカーやベビーカー用の駐車スペースの設置に加え、展覧会来場者向けの託児サービスも実施することもあります。子供を預けて鑑賞することも、子供と一緒に鑑賞することも、両方選べる環境を整えていると紹介しました。

受講生からは「美術館を訪れる理由を鑑賞以外にも持てるような取組は、美術館を身近にする施策のひとつとして非常に面白いと感じた」といった感想が寄せられました。

■子供の主体的な鑑賞を育むための工夫とは？

次に、教育普及事業として東京都現代美術館が学校と連携して取り組んでいる「スクールプログラム」について紹介しました。教育普及担当の学芸員が子供たちと作品を鑑賞する「ミュージアム・スクール」では、「観察すること」「想像すること」「対話すること」の大切さを伝えていると説明。あらかじめパッケージ化されたものではなく、事前に学校教員との打ち合わせを行い、クラス数や滞在時間、何をどう見たいかを丁寧にヒアリングした上で、学校ごとにオーダーメイドで鑑賞体験をつくっていくことが特徴だといいます。鑑賞前には「見方に1つの正解はないので、思ったことや気づいたことをどんどん言葉にしてほしい」と伝え、対話を引き出すように心がけているとお話しになりました。

鳥居さんは、対話による作品鑑賞の導入に最適な作品の1つとして、コレクション展示室に入ってすぐに設置されている彫刻作品『太陽のジャイロスコープ』を挙げました。同作は360度すべての方向から見ることができるため、近づいたり、遠ざかったり、しゃがんで見たりと、視点を変えながら鑑賞することができます。そこで発見したことをグループで共有することで、対話を生み出していると解説しました。加えて、体を使った鑑賞や、五感を使った体験を大切にしており、鑑賞後の子供たちへのアンケートでは、「人によって想像することが違って面白かった」「友達の気づきが自分と違って新鮮だった」「見る方向を変えると発見が増えた」「また家族と来たい」といった声が多く見られたと語りました。

館内各所に設置されたプレートに乗り、風景と音を楽しむ『点 音（おとだて）』という作品を、盲学校の生徒と共に鑑賞した際のエピソードも印象的でした。打楽器のような音が聞こえる空間にそびえ立つ壁に生徒が耳を近づけたところ、プレートの上では聴こえない豊かな音が聴こえることを発見したといいます。これまでに何度も鑑賞を重ねてきた鳥居さんですが、盲学校の生徒と共に鑑賞することで、新たな作品の楽しみ方を知ることができたと語りました。

また、鳥居さんが現場で子供たちと接する際に注意している点として、「させる」という言葉を使わない意識を強調しました。子供に「見させる」「やらせる」「言わせる」のではなく、子供自身が自分で考えて「見たくなる」「話したくなる」ことを目指しており、主体的かつ能動的な鑑賞体験につながるサポートを心がけているといいます。



■アーティストならではのワークだからこそ、参加者に起こる変化

都内の学校を対象に、東京都現代美術館の収蔵作家が学校で授業を行う「アーティストの1日学校訪問」では、何か成果物をつくることではなく児童・生徒が「アーティストと出会うこと」自体を大事にしていると説明。美術館への来館が難しい学校に現代美術を届けることや、独自の視点で作品をつくる大人との出会いを通じて子供に新たな視点を得てもらうことが目的だと解説しました。

鳥居さんは一例として、開発好明さんが実施したワークを

紹介。くじを引いて、そこに書かれた指示に沿って児童・生徒それぞれが違った作品を作っていく活動の中には「隣の人にお願いをして自由の女神を描き加えてください」「教室の片隅で泳いできてください」など、他者との関わりやパフォーマンス性のあるミッションが重なり、体育館や教室が不思議な空間に変わっていったといいます。同じ「作品を高くしてください」というミッションに対して、ある子は給食のラーメンを持ち上げる様子を作品で表現し、別の子は使う色の彩度を高くして表現するなど、ミッションをどう捉えるかは生徒それぞれで、鳥居さんは「アーティストが考えた授業だからこそのアウトプット」だと振り返りました。

東京都現代美術館ではスクールプログラム以外にも、子供から大人まで参加できる普及プログラムを多彩に展開。このうちギャラリークルーズとワークショップを紹介しました。ギャラリークルーズの例として、小学校低学年向けの「こども “美術館探検” クルーズ」や地域のお祭りへの出展、申し込み不要のオープンワークショップ形式のクルーズなどについて解説。ベビーカーで参加できるプログラムもあり、子供から高齢者まで幅広い世代が参加できるような取組が様々な視点で企画されていることを具体的にお話しになりました。

続いて、ワークショップのプログラムの一例として青山悟さんによる「現代美術を通じて、他者の存在について考える」を紹介。『2人1組でジャンプしながらお互いの似顔絵を描く』『2人1組で1本の鉛筆や筆を共有し、言葉を交わさずに作品を仕上げる』といった少し変わった指示のもとで参加者が制作する様子が、動画で映し出されました。ワークショップの参加者からは「絵を描くのが苦手だったけれど、それでも楽しめた」「現代アートは好きではなかったが、アートを通して人に届く、つながるという体験が新鮮でした」といった感想が寄せられたといい、参加者自身の体験からアートの面白さに出会える活動だったと振り返りました。

鳥居さんは、こうしたプログラムの中で対象をなるべく限られた年齢層や属性に偏らないようにしていることを強調。小学生から大人まで、幅広い人が同じ場で作品づくりに取り組むことで、同質の集まりでは得られない新たな視点や気づきが生まれると語りました。

受講生からは「単発のプログラムの場合、参加者の声をどのように集めているのか」という質問が挙がりました。鳥居さんは、ほぼすべての事業で参加者アンケートを実施していると回答。小学校低学年向けのプログラムでは、言葉で表現しなくても回答できるよう、表情で楽しさの度合いを選んでもらう形式のアンケートを使うこともあるといいます。

また、プログラム終了後に参加者へ直接声をかけ、話を聞くことも大切にしているそうです。実際に話すことで、アンケートに書かれた感想の背景まで見えてくることも多いと説明しました。

■最後に

鳥居さんは、リニューアルによって小さな子供連れの来館者が増えただけでなく、多目的トイレやスロープ、広々としたレストランの整備を通じて、さまざまな方が来館するようになったと振り返りました。貸し出し用のイヤーマフや、音や光に敏感な方が落ち着けるカームダウンスペース、美術館の建物の構造を触って把握できる触察模型、触れて形を確かめられる触図などが用意されており、鑑賞サポートの体制も整えていると解説しました。

最後に、美術館との関わりが次の世代へつながっていく循環についても紹介。開館から30年以上が経ち、子供の頃に東京都現代美術館を訪れていた人が、今はインターン生や博物館実習生、アルバイトとして同館の活動を支える側に回ることも増えていると話し、講義を締めくくりました。



■コレクション展『はじめて、びじゅつ』や館内の作品を鑑賞

講義の後、受講生は美術と関わるさまざまな「はじめて（初めて／始めて）」を切り口としたコレクション展『はじめて、びじゅつ』や、館内に設置された作品を鑑賞しました。鑑賞にあたっては、リニューアルに合わせて屋外に設置された彫刻作品の解説リーフレットや、講義でも取り上げられた『点 音』の位置を記したマップも配布。館内の設備や鑑賞するうえでの考え方、鳥居さんが実践されている工夫を思い出しながら、自分の鑑賞体験として捉え直す時間となりました。

受講生からは「お話を聞いたすぐ後に、実際の空間を自分の目で見ることができ、臨場感と説得力を感じることができました」といった感想が挙がりました。





アルナルド・ポモドーロ《太陽のジャイロスコープ》1988



中西夏之《夏のための Ⅰ - Ⅴ》1981